

石の俗称

# 牛馬と石(その2)

加藤 碩<sup>1)</sup>・遠藤 祐二<sup>2)</sup>

前回は、おもに牛を中心に話を進めました(加藤・遠藤, 2002)。さて、ここで『牛を馬に乗り換える』ことにしましょう。この諺の本来的の意味は、「不利な方をやめて有利な方をとる」ということですが、ここでは単に「牛と石」の話題から「馬と石」の話題に切り換えるというだけです。あしからず。

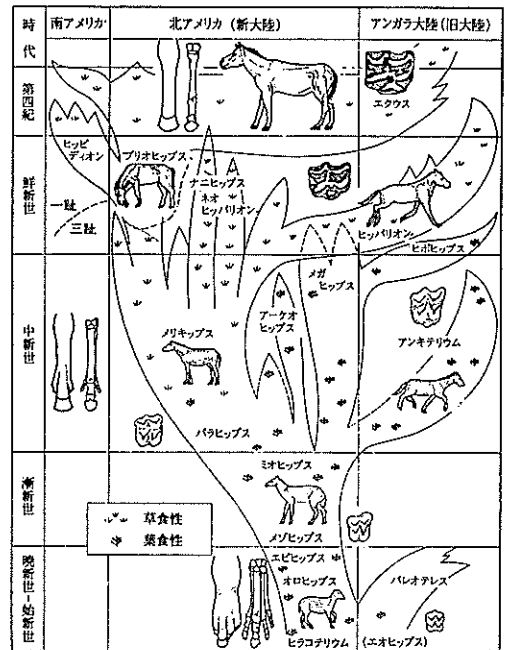
## 1. 馬の歴史

「人に歴史あり」「牛にも歴史はあり」といいましたが、もちろん「馬にも歴史」はあります。ギリシャ神話では馬を最初に作ったのは海神ネプチューンであるといえます。もちろんお話です。実際には次に述べるように約6,000万年の歴史があります。

生物・古生物学的には、馬は奇蹄目ウマ科ウマ属の哺乳類です。最古のウマというかその祖先型は、始新世(約5,800万年前~3,800万年前頃)初期の体長45cmほど、まあキツネくらいの大きさのヒラコテリウム(エオヒップスともいう)で、前肢の指は4本、後肢の指は3本ですすでに指の数が少なくなる傾向を示していました。進化するにつれて体型が大型化し、脚の指の数も減ってきました。漸新世のメソヒップス、中新世のメリチップス、鮮新世のプリオヒップス、そして第四紀エクスととなって現在のように指の数は1本になりました(第1図)。ウマ科の現存種はウマ属だけで、ウマ、アジアノロバ、グレービーシマウマ、シマウマの各亜属と古くに分岐したロバ亜属に分類されます。家畜馬の品種は一説によると200種以上もあります。現生の馬の絵葉書も牛の場合と同様パリで求めましたので写真1に紹介しておきます。

日本最古の馬は、平牧馬(学名;アンキテリウ

ム・ヒポヒポイデス)と呼ばれ、その歯の化石は岐阜県可児郡可児町大森平牧付近に分布する中新世(約1,500万年前)の平牧累層から産出しました。この地層は湖沼に堆積した砂岩・礫岩凝灰岩やその互層などからなり、温暖ではあるが夏と冬の気温の差が大きい気候を示しています。化石は、脚の指が3本の三趾馬であるメリチップスの仲間で、生活場所が森林から草原に移行するころの馬だと考えられています。写真2に北米産の中新世の馬の歯の化石を示しておきます。北米から日本に渡来し、さらにゴビ砂漠の方へ移動していったことが化石の産出から知られています。その他、日本に産する化石馬は、大部分が更新世後期(約3万年前以



第1図 馬の系統樹(小林ほか, 1985)。

1) 産総研 地球科学情報研究部門  
 2) 元産総研 地質標本館

キーワード: 牛, 馬, 馬石, 石の俗称

# LES CHEVAUX / HORSES

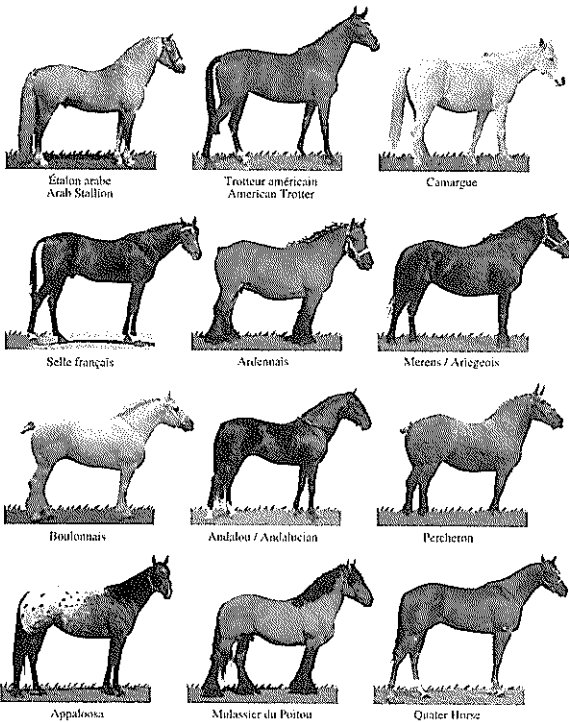


写真1 現生の家畜馬例.

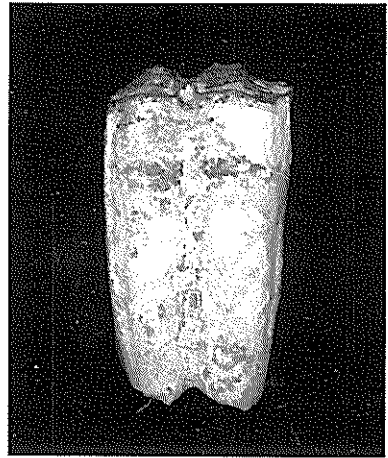


写真2 北米産の馬の歯の化石(中新世、ほぼ実物大)

わかるすべもありません。万葉集に「ムマ」とあるのはウに誤ってム(牟)の字を当てたもので正しくないそうです(中村, 1981)。高天原神話にはすでにウマのことが記されており、日本への最初の馬の伝来は小型の蒙古馬とされています。大型の馬が大陸から伝来したのは古墳時代の478AD頃と言われ、これを大馬(オホマ)とよびこれから「ウマ」という呼び名になったという説があります(中村, 1981)。応神天皇の頃、百済から二頭の大型の馬が献上された記録があり、また、日本書記に「宇麻奈羅葉碎武加能古摩」とあり日向の馬は上代の頃は有名でした。弥生時代後期～奈良時代の住居遺構である長野市の浅川端遺跡から、最近馬の姿を象った青銅製の装身具「馬形帯鉤」が出土したことが報じられました(毎日新聞, 2001.9.28)。これは3世紀頃朝鮮半島中部で製造されたと見られ、当時の交流についての貴重な資料となっています。足の速さだけでなく、普及のしかたも牛よりも馬の方が早かったようです。また、ウマはヒトやウマ以外の家畜と違って雄の価値が高い唯一の動物といわれます。わが身を省みると、何となく納得しますね。

## 2. 馬の石像

まずは人為的な馬の石像です。先日、石川県は松任市の路上を放浪していた折り、とある石屋の店先にたくさんの石灯籠や庭石にまぎって写真3のよ

降)のもので全国各地から知られています。

歴史時代になってからの人間との関わりでは、犬とともに古くから家畜化されていたことでよく知られています。すでに前4300年頃のウクライナのか有名なチェルノブイリ南南東約500kmに位置するデレイフカ遺跡出土の馬骨は馬の家畜化を示していると見られています。なんと家畜らしい獣骨の6割が馬の骨でした。大部分は食用でしたが、一部に馬銜の使用が推定されているそうです。前2500年頃のシュメール、前1900年頃のイラン北東部の遺跡などからは馬戦車の存在が知られています。前16世紀のエジプトでは最古の競馬が行われ、古代オリンピックでは前680年に四頭立馬車競争が行われたそうです(五十嵐, 1998)。

日本では、弥生時代後期とされる兵庫県姫路市の中地天神耶麻遺跡では馬の骨が出土しており、古墳時代中期の5世紀頃には馬形埴輪が各地で出土しています。日本語の古語では「ウマ」は「マ」であったといわれますが、どうしてかは今となっては

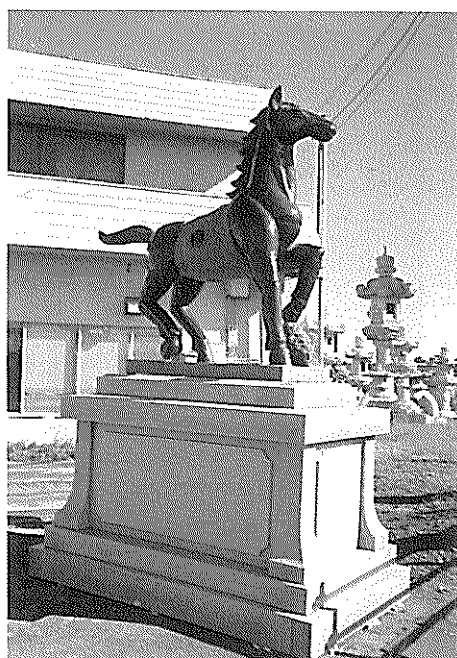


写真3 馬の石像例(はんれい岩製)。

うな勇壮な馬の石像を目にしました。何に使うのかわかりませんがなかなか迫力があり、思わず写真にとってしまいました。石質は、いわゆる黒御影です。御影石というのは、本来兵庫県の御影地方に産出する花崗岩のことをいいますが、全国各地にある「○○銀座」の地名のように様々な「○○御影」があります。ここの黒御影ははんれい岩で、塩基性粗粒完晶質火成岩(深成岩)の一種です。

考古学的には石を削って馬をかたどった「石馬」があり、おもに西日本の古墳から出土します。例えば、福岡県八女市岩戸山古墳、福島公園、および八女郡広川町一条の石人山古墳などで「石人」とともに出土します。また、鳥取県西伯郡の石馬谷古墳から出土したものは、地元で「石馬さん」の呼び名で親しまれており、体長1.5m、高さ0.6mの石造埴輪で前足の一部が欠けているほかは鞍のある大部がほぼ完全に近く残されており、国指定の重要文化財となっているほどです。九州以外ではここだけの産出が知られているだけだそうです。現在は同郡淀江町の歴史民俗資料館に展示されています。馬や牛は筆者らと違って酷使される反面で神性を持つとして敬われてもいました。たとえば、広島県御調郡久井町室山山頂には応和元年(961)

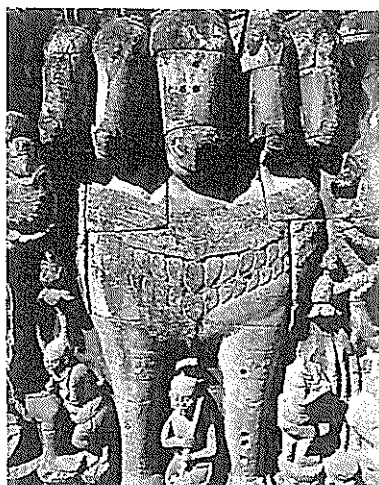


写真4 馬の石彫例(アンコールトム象のテラス、カンボジア)。

に牛馬の神とされる伯耆の石馬大明神を勧請して開基した大仙神社があります。

さらに、馬を神格化したものには、馬頭観音(菩薩)があります。その名の通り、観音の頭上に馬頭をいただく像です。他の観音達が慈悲深い顔だちをしているのに対して、憤怒の相を示すのが一般的です。しかし、わが国では時代が下るにつれ民間信仰化して農耕馬の無病息災を祈る対象となり、馬頭観音の石碑の像は柔和な面持ちになってきました。全国各地の競馬場に祀られるようにさえなっていました。例えば、岡山県阿哲郡哲西町の道端には12体もの馬頭観音が並んで配置されています。江戸時代の文久・天保年間のものから明治・大正時代までさまざまですが、いずれも優しい顔つきをしています。香川県宇多津町の78番札所郷照寺の馬頭観音もそうです。馬頭観音は畜生道を担当し、馬の病氣平癒に功德があるとされています。この他、馬に関係した石仏としては馬鳴菩薩があります。馬鳴は古代インドの仏教詩人アシュバゴーシャで、中国を経て日本に渡り養蚕と機織りの神様として信仰されました。香川県寒川町神前の繁昌寺には馬に乗った菩薩が浮き彫りされた昭和初期に作成された石像があります(杉岡, 1997)。このほか、馬を台座とする仏像に勝軍地藏という軍神がいます。和装と唐装の別がある甲冑姿で、朝鮮半島の武将日羅ともいわれており、東京都港区愛宕神社の本地仏です。もっとも馬頭人身の地獄

の選卒としての馬頭もありますが、

カンボジアのアンコール・ワット遺跡の北約1.5kmに位置するアンコール・トム(大きな都市の意)遺跡は、総面積約9km<sup>2</sup>に達する王朝最大の都城で13世紀初頭に完成したものです。中心部のバイヨン寺院の四面仏顔塔はよく知られています。王宮手前の広場に石でできた全長約300m、高さ約3mのテラスは「象のテラス」といわれることでもおわかりのように様々な象の彫刻で有名ですが、この中に5つ頭の神馬の彫刻があります(写真4)。残念ながら詳しいいわれは知りませんが、古代インドでは、馬や馬頭を神格化した信仰が盛んではありました。悪蛇を退治するパイドウヴァ神や太陽の車を引くエターシャ神などは馬神であり、ヴィシュヌ神も馬頭に化身するといわれます。前述した馬頭観音にもつながるわけです。

### 3. 馬に因む石

次にじらすわけではありませんが、馬そのものではなく、馬に因む石の話題を紹介しましょう。牛の場合と同様、何の石でも馬を繋ぐのに使えば、「馬繋ぎ石」ですと言ってもしまえばそれまでですが、とくに、長野県小県郡地方では、石塊を秤の分銅の形に成形してそれに紐を結ぶ孔を大きく開けておいた「馬繋ぎ石」が各地に残っています。また、同じ地域で「馬のかいば石」もあります。長さ一尺五寸ほど、幅四尺ほど、高さ一尺五寸ほどの石の中央部を長方形に掘り、底の一隅に孔をあけておいて用いたものです。石はそのあたりに産出するものが多くたいい安山岩です。何の石でも馬に乗る時に使えば、「馬乗り石」ですと言ってもしまえばそれまでですが、長野県(旧)南条村山金井にあり、馬に乗る時踏み台にしたという「馬乗石」は、「かうで」(手首が腫れ痛む病)の時に祈願すると効能があったといわれます。治癒したらそのお礼に一釜の茶をさしあげることになっていたといわれます。

長野県軽井沢北東方に位置し重要伝統的建造物群保存地区に指定されている東部町の海野宿は、寛永二年(1625)に北国街道の宿駅として開設されました。日本の道百選にも選ばれている北国街道は中山道と北陸道を結び、佐渡で採掘された金の江戸への輸送や参勤交代、さらに善光寺への



写真5 馬の塩舐め石(海野宿, 長野県)。

参詣路として重要だった街道です。小林一茶の句に「夕過ぎの白の餅の寒さかな」とあるのはこの海野宿で詠まれたものです。明治時代以降も養蚕の町として活況を呈しました。したがって、この街道は荷を運ぶ馬がしきりに往来していたわけですから、汗もかいたことでしょう。馬方にとって内陸部における塩の補給は重要な関心事でした。海野宿通りの西寄りに写真5のような「馬の塩舐め石」が置かれています。白に似た石製の器に塩を入れ、馬になめさせたものです。岩石そのものは別に珍しくもない輝石安山岩で、付近に分布するものです。

この他、馬に因む石というか、馬という名前のある石が天然・人工を問わず各地にあります。例えば、岡山県倉敷市の東北部に位置する庄パークタウンにある片岡山と称される弥生時代の墳丘墓上に5個の巨石が配置されており、その中に「馬立石」や「馬鹽石」といった名称の石があるそうです。

### 4. 馬石・馬岩

お待たせしました。ようやく馬と石の世界に入ります。

地質学的にいう「馬石」には大きく2つの意味があります。構造地質学の分野では、断層運動によって上盤ないし下盤から崩れ落ちて両盤の間に取り残された岩石塊を指し、周囲をすべて断層で境され破砕されて角礫状になっていることが多く、英

語でまさにhorsestoneとか単にhorseといいます。特に引っ張りによってできる正断層型の重力断層の場合をいい、圧縮によってできる逆断層型の衝上断層の場合は、スライスということもあります。もう1つは鉱床学の分野で使われます。鉱床中に鉱石や脈石と混在する母岩片や2つないしそれ以上の鉱脈に挟在されている母岩のことを中石と呼び、その大きなものを「馬石」と俗称します。いずれにしても周囲から隔離されている岩塊のことです。

朝鮮半島南部の馬山やその周辺に岩株状に産する完晶質粗粒の火成岩(深成岩)は地名に因んで「馬山岩」(Masanite)と称されます。典型的な花崗岩から閃緑岩に至るその中間的な組成を呈する花崗閃緑岩、トータル岩やアダメライトからなっています。白亜紀の慶尚系佛國寺統に属します(kim and Kim, 1963)。

わが国では、滋賀県甲賀郡甲南町の南西端で三重県阿山町との境に位置する岩尾山は、延暦年間に最澄が開山したといわれ、修験道の霊山として栄えましたが、中腹の息障寺の付近には、花崗岩からなる様々な名称の岩塊があります。とくにこの山頂部の伊勢神宮を正面にする位置には巨大な「お馬山」(象岩ともいう)があって、神仏習合時代を忍ばせます。元禄年間(十七世紀)ここを訪れた芭蕉の有名な句「行く春を淡海の人とおしみけり」の碑が息障寺の参道沿いにあります。

以下に、石の俗称として馬に似た形の石・岩を「馬石(岩)」と称するものをいくつか紹介します。

長野県布引溪谷の「牛岩」のところで前述したように(加藤・遠藤, 2002),そこに「馬岩」があります。大変高い崖なので、狭い参道からはうまく写真が撮れませんでした(写真6)。「牛岩」と同様に今から3~400万年位前の鮮新世の布引層で、凝灰角礫岩、凝灰岩や火山性の砂層からなっています。岩層の違いによる浸食の程度が異なることや割れ目が入って岩体の一部が欠落して、全体としてなんとなく、そういわれて見ればという程度で上部が馬の頭部のように見えます。この掲示板には『布引山の裏の大地を御牧ヶ原といい、平安時代、朝廷直轄の官牧でありました。紀貫之が詠んだ「望月の駒」は当地の産である。この大地で育てた駿馬を朝廷に貢馬としておさめる際に唄われたうたが小諸馬子唄、<小室節>と言われており、今も唄い



写真6 馬岩(布引観音参道, 長野県) 矢印部分が馬頭部。

つがれている。その因縁が岩に馬の駆ける姿の如く現れている」とあります。

馬が石に化したといういわゆる石化伝説とそのいわれのある石もあります。例えば、徳島県徳島市芝生町の水田の中にある小さな岩山は旗山といえます。寿永四年(1185)2月17日、源義経が平家追討のため風雨をつけてわずか150騎余りで小松島港の赤石(一説には徳島市八万町)に上陸してこの山に布陣し、戦意高揚のため源氏の白旗を掲げたといういわれに因んでいます。ここに、宇治川の戦いに先陣を争った名馬「池月」が倒れて石に化した「天馬石」があるそうです。そのとき惜しくも敗れた「スルスミ」が悔しきのあまり石に化したという「天満石」は徳島県小松島市にあるとのこと(加藤・遠藤, 1999)。

この他北海道の江差町の沖合にある鷗島にもやはり鮮新世の岩石が(ただしこちらは砂岩や礫岩などの堆積岩と凝灰岩や火砕岩からなりますが)同様に差別浸食を受けた奇勝・奇岩の中に「馬岩」と称するものがあります(加藤・遠藤, 1999)。

## 5. 馬体各部と石・岩

牛の場合はその座った全体像を塊状の岩に見立てやすいので、「牛岩」は各地にあります。馬の場合はその長い四肢が邪魔してその全体を模するこ

とは難しいようです。そこで、次に述べるように馬の身体各部を個別に模した石・岩が多々あります。

### (1) 足

「馬の足」で思い出すのは、ローマのカエサルカエサルの愛馬です。その馬はカエサル以外の何人をも乗せるのを拒んだという忠誠心を持っていたとのことで、その前足はウェヌス・ゲネトリックス神ゲネトリックス殿の前に立っている像が示すように人間の足に似ているとのことです(例えば、ウェザーレド, 1937)。

一般に「馬の足」とは芝居で作り物の馬に入ってその足になる役者のことで、転じて下手な役者のことをいいますが石の世界にもあります。といっても形が似ているという意味ですが、徳島県美馬郡貞光町端山、光駅からバス長瀬下車15分の木綿麻橋木綿麻橋から貞光川の上流約7kmの西岸にある蜂須神社裏手には変成岩の一種である結晶片岩の主として絹雲母石墨片岩からなる岩壁は「蜂須崖」と呼ばれています。その一部に石灰岩塊が挟在されており、そこにある鍾乳石の1つが「馬の足」と称されているそうです。

### (2) 足跡

足があれば当然足跡があります。石の世界も例外ではありません。「足跡石」の一種で「馬蹄石」というわけですが、馬の事を駒ともいうので「駒の爪石(爪跡)」と俗称されることも多く、各地にあります。「馬蹄石」があちこちで知られているのは、一種の招福信仰によるのではないかと思います。というのは、馬の沓や蹄鉄を拾うと縁起が良いとする民間信仰が江戸時代からあったのです。さらに古代中国の貨幣の中に「馬蹄金」というまていごで編んで馬の足にかぶせて蹄を保護する馬沓に似た形の金塊があり、これが馬沓が福を呼び込むという信仰の原点と考えられています。石の風化浸食による地質学的には何ということのない窪みを馬の蹄跡になぞらえておめでたがっていたのでしょう。その一端を孫引きしましょう(加藤・遠藤, 1999)。

①家来ならぬ大将の八幡太郎の「馬の足跡」があります。これは、石の上についた足跡などというケチなものではなく、茨城県日立市佐井北部の川尻の小貝浜と常磐海岸の間の海岸にある海食洞窟の一つです。地元ではチャンポンとも俗称されてい

ます。天井部が開口し、南北にやや長く、東西に短い周囲約150mの長円形をなし、深さ28mの潮吹き穴となっています。洞窟自体は、幅約5m、高さ約3mの半円形の入口を通じて外洋に連なっているため、海食洞窟内部まで波が侵入し、外側と内側の双方から浸食されています。洞窟の下底は満潮時に水没し、干潮時に花崗岩類起源の石英・長石に富んだ中～粗砂がその北側に露出します。

②長野県下には各地にあります。高井郡科野村赤岩の林の中にある石は、子馬の足跡が一杯についているので「子馬の蹄石」とも呼ばれています。下高井郡夜間瀬村横倉のお宮前の小川にかかる石橋には、日露戦争の時、八幡様が馬に乗ってお出でになったときつけた馬蹄の跡があるそうです。同じく、下高井郡平隠村上條には、昔、戦いがあった時あまり馬を走らせすぎたため、馬が躓いてつけた馬蹄の跡を残した石があるといえます。

③愛知県下にも各地にあります。渥美郡二川町大岩の西方、火打坂の中途にあったという岩は、駒の爪型が印されていましたが、明治十三年(1880)の新道工事の際に砕いてしまって今はないそうです。同じく渥美郡福江町大字高木の金毘羅山にある岩は、大昔、浅間様が空を馬に乗ってやって来て、この岩に降りた時についた四つの駒の爪型の凹みがあるといえます。その横にさらに草履型の凹みと一つの小穴があるのは、浅間様の従者が杖について草履で立った跡だということです。芸が細かいですね。額田郡山中村大字山綱にある牛岩の瀧の上流にある巨岩には、大昔神様が犂毛の駒に乗って天よりこの岩上に立った時の蹄跡が二～三残っているといえます。付近の人々はこの神の忌避に触れ厄があるとして犂毛の駒を飼わなかったそうです。因みに犂毛というのは馬の白毛に黒・茶色などの毛が混ざっているものをいいます。

④島根県飯石郡掛合町を流れる三刀屋川上流部の竜頭八重滝県立自然公園にある竜頭が滝の雄滝裏側には広い天然の洞窟があり、名馬「池月」の蹄跡と称される窪みがデイスайт(石英安山岩)塊の表面にあるそうです。

### (3) 背中～首

「馬の背を分ける大雨」という言い回しがあります。馬の背の片側に雨が降り、他の側には降らな

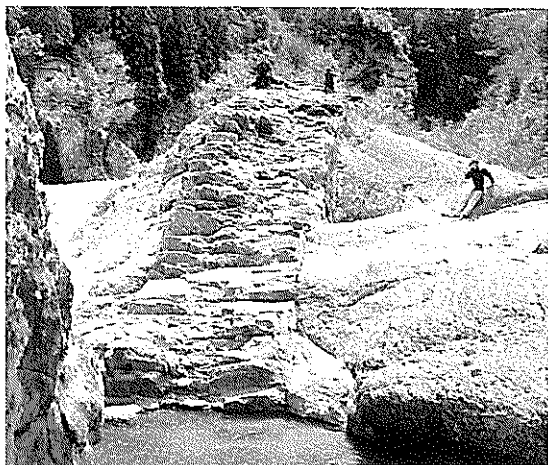


写真7 馬の背岩(愛知県鳳来町)。

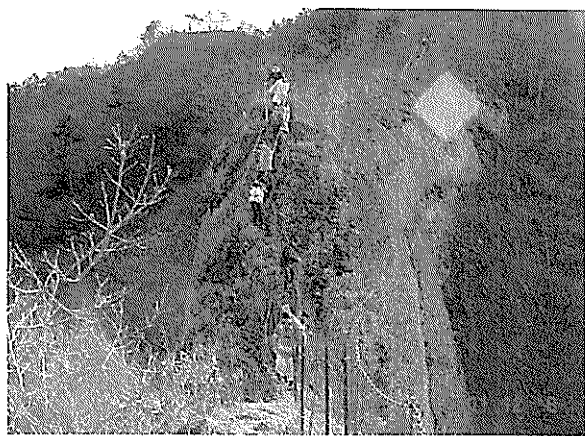


写真8 馬の背岩(群馬県甘楽郡南牧村)。

いという意から、夕立などがある場所には降り、すこし離れた他の場所には降らない例え、つまりたいへん局地的な降雨をいいます。このように馬の背の形状は、私達になじみが多く、地質学的にも褶曲の背斜構造を説明するのに馬の背状などということがあります。もちろん石の世界にも「馬の背岩」はあります。愛知県鳳来町、JR飯田線湯谷駅近傍の湯谷温泉付近の豊川支流の宇連川沿いの峡谷にあり、国の天然記念物となっています。川のほぼ中心を南北方向に連なる岩脈で長さ約122m、幅は最大6.3m、最小2.5mで、川底からの高さは約2mです。付近に分布する約1,500万年前の中新世の設楽層群の比較的軟質な流紋岩質凝灰岩に後から貫入した(後に珪化した)硬質の安山岩岩脈が浸食に抗してできたもので、岩脈を背骨に見立てて「馬の背岩」(「馬の背石」ともいう)と呼んでいるのです。

全く同様な「馬の背岩」が群馬県にもあります(写真8)。黒滝の不動寺の近くでいわゆるグリーンタフと呼ばれる新第三紀の改定火山の噴出物を主体とする火山砕屑岩類に貫入した安山岩質の岩脈が浸食に抗して残ったものです。

福岡県朝倉郡宝珠山村の耶馬日田英彦山国定公園に属する英彦山南麓の岩屋公園内には「岩屋の奇岩」と称される大小の奇岩があり、県の天然記念物となっています。例えば、高さ54mの「権現岩」「貝吹き岩」「重ね岩」などですが、そのうちの1つに「馬の首根岩」があるそうです。英彦山地域は

鮮新世の英彦山火山岩類が分布し、輝石安山岩溶岩や凝灰角礫岩などからなっています。やはり浸食に強い岩体が奇岩を構成しているわけです。

#### (4) 耳

馬の耳という有名なことわざ『馬の耳に念仏』『馬耳東風』を思い出します。英語でいうと“Sacred verse to the ears of a horse”とか“All my talk passes over the audience”というところでしょう。『近頃の若いやつには何をいっても・・・』というのは筆者らが年老いたせいでしょうか。

さて、石の世界の馬の耳の話に行きましょう。朝鮮半島南部に位置する全州(チョンジュ)は、李氏朝鮮の開祖李成桂(1335～1408)の出身地として知られる国内第7位の韓国有数の都市です。この東方約30kmに馬耳山まゐさんと呼ばれる山があります。その形が馬の耳に似ていることから名付けられたもので、東の丸みを帯びた雄峰(678mと667mの2説があります)と西のやや細い雌峰(685m・673m・637mの3説があります)の2つの岩峰からなっています(写真9)。伝説によると、これらは天に上がることに失敗した山の神とその妻が石に化したものといわれます。かれらは天への飛行が人目によって汚されないように大変朝早く出発しました。しかし、運悪く勤勉な家政婦が彼女の家族の朝食のために水を汲もうと早くやって来てしまったのです。そして神々が谷を越えていくのを見てしまいました。そこでかれらはやむなく着地し巨大な岩峰に変じて

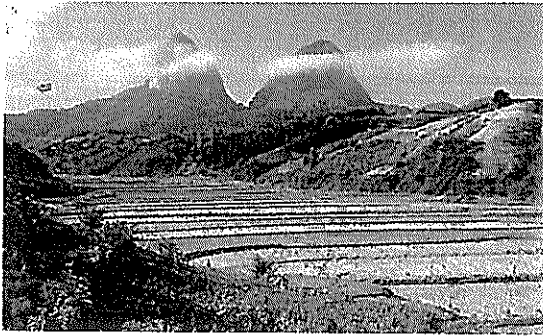


写真9 馬耳山の双耳峰, 鎮安, 大韓民国(小林・中元, 2001)

しまったというのです(Lee, 1993)。この馬耳山には有名な馬耳塔舎(パゴダ)があります。これは、李甲龍処士(Yi Kap-ryong)が1885年に10年かけて石を円錐形に積みあげたもので高さ15mに及ぶものもあります。現在80基ほど残存しているそうです。彼は1957年に98歳でなくなりましたが、今日でも近代的な登山装備がなければ登れない雄峰を麦藁靴をはいただけで容易に上り下りしたという類の超人的な逸話が多い有名な人です。地質学的には、馬耳山は大部分が花崗岩やへんま岩からなり、

周囲の中生代の硬質な礫岩から浸食に抗して突出した地形です。

まだまだ、話はずきませんが、今回はここまでといたしましょう。

参 考 文 献

五十嵐謙吉(1998):十二支の動物たち. 八坂書房, 227p.  
 加藤碩一・遠藤祐二(1999):石の俗称辞典-面白い雲根志の世界-. 愛智出版, 312p,  
 加藤碩一・遠藤祐二(2002):石の俗称 牛馬と石(その1). 地質ニュース, no.569, 57-64.  
 Kim Jong Hwan and Kim Jeong Taek (1963): Masan Sheet, Geological Map of Korea(1:50,000), explanatory note.26p. (in Korea) with English abstract, 6p. Geological Survey of Korea.  
 小林巖雄・吉村尚久・吉谷昭彦・小沢幸重(1985):哺乳類の時代-第三紀. 双書 地球の歴史6, 共立出版株式会社, 126p.  
 小林克己・中元直子(2001):ニュートンガイド 釜山・慶州・濟州島&ソウル. 株式会社ゼンリン, 208p.  
 Lee Kyong-hee (1993): Korea Culture. 319p. The Korea Herald Inc.  
 中村 浩(1981):動物名の由来. 東京書籍, 240p.  
 杉岡 泰(1997):石の博物誌Ⅱ, 瀬戸「石」海道. 創風社出版, 266p.  
 ウエザーレッド, H, N, (1937):中野里美訳(1990)古代へのいざない-プリーニウスの博物誌. 雄山閣出版, 332p.

KATO Hirokazu and ENDO Yuji (2002): Stones named after cattle and horse (part2).

<受付: 2002年3月19日>